
僕とバカと召喚獣達！

麗也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とバカと召喚獣達！

【Nコード】

N3080Z

【作者名】

麗也

【あらすじ】

ここ文月学園に転入してきた影譲麗也は2-F組の仲間達と楽しいく無事にちゃんとした生活を送ることができるのだろうか？
そして幼馴染との再会と展開は・・・

キャラクター紹介（前書き）

初めまして！初めて投稿してみました。が、下手くそですいません！
こんな下手な小説をみてくれたらとても嬉しいです。

キャラクター紹介

キャラ紹介

主な登場人物

影譲麗也 木下姉弟との幼馴染。観察処分者同様の力が使える。明久の次にバカ。

吉井明久 文月学園を代表するバカ。観察処分者。

坂本雄二 小学校の時は神童だった。不良。頭がとてもキレる。

土屋康太^{ムツリーニ} 保健体育以外は何もできないバカ。写真を撮るのが得意。

まう。料理が得意。すぐ鼻血をだしてし

木下秀吉 演劇部に所属している。文月学園が誇る美少女？声帯模写ができる。

霧島翔子 学園首席。一途な女の子。自称坂本雄二の妻。

姫路瑞希 学年トップ2。料理の腕は殺人級。吉井明久に恋をしている。

島田美波 ポニーテールと釣り目が特徴の女の子。ヤンデレ。吉井明久に恋をしている

る。

木下優子 BL本が大好きな女の子。なぜか顔はカワイイはずなのにもてない。

清水美晴 同性愛者。島田美波のことが大好きな女の子。

久保利光 清水美晴同様同性愛者。吉井明久が大好きな男の子。

工藤愛子 ボーイッシュな女の子。保健体育は実技が得意。人をからかうのが好き。

（ストーリー紹介）

主人公影譲麗也は高校2年生の春にここ文月学園に転入してきた。

そして、2-F組に入るがいったいどんな生活を送るのだろうか？

そして、久々に会う幼馴染の反応は？

キャラクター紹介（後書き）

これから作品作りに入りますが、なるべく下手に書かないようにがんばりたいです。では、期待している人はあまり期待しないで下さい。でも、頑張って自分なりに書いてみます！

ゝ出会いゝ（前書き）

さっそく第一話投稿してみたいと思います！書き方は下手くそですが、そんなの気にせずに読んで頂けたら幸いです。

～出会い～

影譲 side

月学園に僕は今日

桜が満開に咲くここ文

転校する・・・ちよつと心配だ・・・。

第一この方に来るのは大分久しぶりだ。

この僕のことなんて誰も覚えていないと

思うし、だいたい僕の事を覚えている奴

がいたとしても僕の知らない奴だろう・

たぶん・・・。もし、僕の幼馴染がこの

学校にいたらな～。。。。。

って！こんな事してられなかったんだ！

急げ、急げー！早くしないと遅刻しちゃ・

・

ドンっ！

いなかった

「痛っ！す、すいません！前ちゃんと見て
ものだから！」

めんね・・・って

君誰？」

ます！よろしく

「あっ！僕、今日転校する影譲麗也と言
いお願いします！あの・・・君は誰ですか？」

君と同じ

間！悪いけど

られちゃうから

！・・・」

「あっ！僕？僕は吉井明久って言う名前で
学校の生徒だよ・・・って！もうこんな時
僕もう行くよ！遅刻しちゃうと鉄人に怒
ね！君も早く行ったほうがいいよー！

いや。

あ・・・行っちゃった・・・僕も急いだ方が

る前に

それにしてもこの学校（文月学園）に入

けど大

振り分け試験？って言うテストをやった

ぶんと

丈夫かなー？僕、テストやる前にずい

よな

遊んじゃったから全くできなかったんだ

最低と

どうしようか？もし、点数が悪すぎると

な

言われているFクラスに入っちゃうもん

うせ良い

本当にどうしようか？まっ！いいか！ど

んまり悪い

点数なんてとれるわけないし、それにあ

マイナス

方向に考えるとろくなことはないしな！

うんうん！

思考はダメ！プラス思考、プラス思考！

大丈夫さ・・・

きっと大丈夫なはず・・・うん、きっと

☆

まあしかたがないよ！

てFクラスに入るしか

「やっぱり、こんな点数だよな〜ま、
遊んでいた自分が悪いんだし・・・諦め
ないよな〜」

スに入る事に

なんてこった・・・よりによってFクラ

やっぱり嫌だ

なるなんて・・・どうしよ、どうしよ！

いなくて孤独のまま

な〜・・・もしも、知っている奴一人も

うよ？

一年を過ごす事になったら僕泣いちゃ

題のFクラスの

そんな事を考えながら歩いていると問

いる・・・

前に来ていた・・・嫌なオーラが漂って

担任と思われる

そんな事を考えていると教室の方から

・なんだろう？

男性がクラスの皆に何かを話している・

担任（福原慎）
皆さんに紹介を

「それでは今日は転校生が来ているので

きてください。」

したいと思います・・教室に入って

・確か誰かが

あっ！僕とうとう呼ばれちゃったよ・・

のは、最初に決

言っていたなー！人の印象って言う

ら皆を圧倒させる

まるって・・うん！最初で決まるのな

ってやるぞ！もう、

ような自己紹介をしてやる！うん！や

決心はしたぞ！うん！やってやろう！

担任（福原慎）
んですよ？」

「どうしたんですか？入ってきてもいい

ばれたようだ・・

そんな考えをしている内にどうやら呼

ってやろう！

もう決心はしてある！よし！堂々で行

は影譲麗也と

「失礼しまーす！まず、初めに僕の名前

お願いしまーす！」

申します！これから一年間よろしく

クラスの皆「・・・・・・・・・・・・・・・・」

か皆僕の事を見る

え？ちよつと唐突すぎたかな？なん

いう視線で見ている

視線が「バカだ・コイツ・」って

う？

よ？いったい何がいけなかったんだろ

ことについて

そんな考えをしている時、誰かが僕の

しゃべっていた・・・

たひとだ！えーつと

「あ！あの人確か校門の前でぶつかっ

確か名前は・・・」

「影譲麗也じゃろう？おそらく・・・」

～出会い～（後書き）

いかがだったでしょうか？ほとんど書き方は原作と同じになっちゃいました。すいません！書き方があまり僕分からないのでちよっと同じになっちゃいましたが、もう少し！後、ほんのもう少しでいいんです！そうしたら、自分オリジナルな書き方を見つけてみせますので、もう少し、この書き方でよければこの小説を見ていただくとありがたいです。後、この小説を見ていただきありがとうございます！

＊説明下手ですいません。あと、追加のキャラクター紹介↑今更すいません！

福原慎 明久達の担任。

鉄人 西村教諭のこと。あと、補習担当の先生。

後、自分のことを小説に出していますが、

すいません。これもやっぱり欲望といいま

すか、欲と言いますか・・・とにかく自分

を出しちゃってすいません！でも、そんな

小説でもよければ、見てください！みていた
だければ、幸いです。

ゝ紹介ゝ（前書き）

一気に今日で二つ投稿させて頂きます！みていただければこちらとしても幸いです。今回は、ちよつとタイトルがタイトルなだけに小説はほんの少し短いです。

～紹介～

影讓 side

った

よ～～！」

「いや・・わしも正直びっくりじゃぞ？

また

麗也と会うとは思わなかったからのう。

」

秀吉

「いや、僕の方がびっくりだよ！それに
に会えて嬉しいし！」

「そう言ってもらえると嬉しいのう！わたし
も会えて嬉しいのじゃ！」

はど

「あれ？そういえば優子は？秀吉、優子
ここにいるの？」

也は

「姉上のことか？そうじゃったな・・麗
なにも知らぬからのう・・姉上はAク
にいるのじゃ。」

ラス

の優

んだ

「えっ！あの優子が？昔はバカだったあ
子がAクラスだって？へえー成長した
なく優子も。昔は・・・」

・

と睨

明久「あのー楽しく話している途中悪いけど・
須川くん達がいっつきり影譲くんのこ
んでいるよ・・・ほら。」

『えっ？』

こと

うう・・・本当だ・・・思いつきり僕の

いけ

睨んでいるね・・・どうしてか分からな

ね・

ど、これ以上秀吉と話さない方がいい

・・・まだ話したいけど。

の会

（ここだけの話、須川くんは異端審問会

チャ

長だから、あんまり彼の前で女子とイ

メだ

イチャしゃべったり遊んだりしちゃダ
よ？殺されちゃうから・・・）

うと

僕にしか聞こえない声で吉井くんが言

の発

その場から離れた・・・でも、吉井くん

言はちよつと疑問に思う所がある・・・

・

秀吉は女の子じゃないんだけどな～～

ま！いっか！気にしない！気にしない！

こと

「あ！影譲くん、まだ秀吉以外の人達の

は知らないとおもうから、一人ずつ自

己紹

介しようよ！」

???

「おう・・・それがいいな。」

そう言うのと背の高い頭がつんつんな人

が自

己紹介を初めた・・・

でも

よろ

と寝

にで

たが

う？

う？

「俺の名前は、坂本雄二ってんだ。代表

坂本でもどっちでもいい・・・これから

しくな。」

そうやってダルそうに自己紹介をする

てしまった。大丈夫なのかなー？

？？？
「じゃあ、次は俺がやる・・・」

そう言う和小柄な体格をした男性が前

て自己紹介を初めた・・・

「・・・名前は土屋康太・・・」

名前だけ言うと言さつと小走りに走っ

去り際に何かを落とした・・・なんだろ

カメラ？カメラなんか何に使うんだろ

「これは・・・授業の様子を撮るためのも

の・

・・・」

「「嘘だっ!」」

たけ

うん?ものすごいツツコミをいれられ

れに、

ど、別に変なこととは言っていないよ?そ

ミを

さっきまで寝ていた坂本くんもツツコ

とっ

いれるくらいだから、きっと嘘が皆に

てはもう見え見えなんだろう・・・。

「おい!ムツツリーニ・・・影譲の前でなに平

か・・・?

然と嘘つくんだ!うん?別に隠さなくてもいいじゃねー

いつかは知ることなんだから・・・な、影譲?

実はな・・・このカメラはなあーいやらしいことをする

ために使うカメラだ!」

!!

「へえーそうなんだーっってええー
それって犯罪じゃないのー!」

「………!! (ブンブン)」

必死に首をふっているけどもう遅いよ

??

事実知っちゃったし……

「さて!これで一応この場にいる奴全員

は紹

介し終えた……」

「まだでしょーっっっっ!まだこの

僕が

紹介をしていないでしょー!全く……

・

雄二には呆れるよ……」

たな

「お!すまなかった……明久がまだだっ

……いいぞ……さっさとやれ。」

僕の

「まったく……じゃあ改めて紹介するね!

影譲

名前は吉井あきひさ……ってなんで
くんと秀吉以外の二人は帰っちゃった

の！

！

そんなに僕のことはどうでもいいのお

——・・・」

「・・・」

「吉井くん、行ってしまったね・・・」

「皆、行ってしまったの・・・」

僕はある意味このクラスでやっていく

こと

た・

ができると、この時心の底からおもっ

・・・

〽紹介〽(後書き)

すいません！予定より文が長くなってしまいました・・・でも、こんな小説でも読んで頂けると僕としては嬉しい限りです！

ゝ誘いゝ（前書き）

応援頂いているようで嬉しいです！今回は秀吉と麗也が遊ぶ話です！
見ていただけたら幸いです！

影讓 side

あーやっと授業全て終わったー！
慣れていないせいかずいぶんと時間を
長く感じたなー！さて！もう授業
は終わったし・・・もう疲れたし、帰
ろうかなー・・・

と、そんなことを思っているとひとりの
人が近づいてきた・・・うん？よく見た
ら秀吉じゃないか！いったいなんの用
だろう・・・

「麗也よ・・・今日・・・ひまかのう？」

「えっ！別に用事はないけど・・・」

「だ、だったら今日久しぶりに遊ば
ないかのう！わし、何もすることが
なくて悩んでおったんじゃないが・

・・どうかのう？」

「うーん・・どうしようかな？ 今日、暇じゃないけど、疲れたからな・・・」

「あっ！別に無理じゃったらいいのじゃぞ？」

あ！そういえば秀吉と遊ぶのは久しぶりだな！ここで断ることもできんだけど、せっかくの誘いだし、

なんか断るのも悪い気がするしな

・・・ってアレ？僕ってこんな

優柔不断な男だっけ？と、とにかく

く！秀吉のせっかくの誘いだし、

遊んじゃおうか！

「いいよ！別に、僕も暇だったしさ！」

「ほ、本当かのう！じゃあ、帰ったらすぐに家に来るのじゃぞ？あつ

！わしの家は知っておるな？昔と
変わらない所にあるからのう！じ
ゃあのう！」

タタタタッ！

あ！行っちゃった・・そんなに嬉
しかったのかな？ま！僕も久し
ぶりに話せて嬉しいし！走ってか
—えろつと！

僕はなぜか足がとても弾んでいた
・・・なんでだろう？

☆

「ここだったよねー確か秀吉の家っ
て・・・」

僕は自分でも早いと思われるほど
早く秀吉の家に着いてしまった・
・うんっ？確か前にはこんな所

に花壇なんてなかったはずなんだ
けどな〜？ま、おおよそ考えつ
くのは、たぶん秀吉のお母さんが
飾ったんだろう・・・っと！そんな
事よりも早くいかなきゃ！秀吉待
たすのも悪いし・・・さっそくイン
ターホンをおさせてもらおうかな
？

ピンポーン

そうしてちょっと経った後にイン
ターホンから秀吉の声が聞こえた
・・・

「ちよつと、待つのじゃ。」

そうして数秒も経たないうちに秀
吉がドアの前に来た・・・って早い

な！

「さっ！さっ！早く入るのじゃ！」

僕は秀吉の家に入るのにドキドキし

た・
・
・

何でだろう？

ゝ誘いゝ（後書き）

まだ秀吉と遊ぶ編はまだ終わっていないのでまたよんで頂くと幸いです。

ゝ思い出話ゝ(前書き)

今回でこの話が終われるよう、頑張って書きます！読んで頂くと嬉しいです！

～思い出話～

影讓 side

「おじゃましまーす！」

僕はなぜか急ぎ足で家の中に入った・

・

やっぱりちょっとおかしい！おかしい

よ？

僕・・どうしちゃったんだろう・・

そうやって考えていると、いつの間に

か秀

吉の部屋に入っていた・

「さてっ！何して遊ぼうかのう♪麗也！」

「ちよつと待って！秀吉！さっきから取

り乱

し過ぎ！ちよつと落ち着こう？ね？・

「

乱れ

「そ、そうじゃったな・・ちよつと気が

ていた・・すまん・・」

気に

「あっ！別に謝らなくてもいいよ！特にしてないし・・・」

のう。」

「そうか？いやーやっぱり麗也は優しい

っとそん

「そ、そんな事言ったら照れるな・・・
な事よりもなにして遊ぼうか？」

って特に

「そうじゃのう・・・いやゝ実はこれい

しょうか

なにも考えてなかったのじゃ・・・どう
のゝ？」

聞いてい

うゝん・・・僕もここに来る前になにも

るのか聞

なかったし、持ち物もなにを持ってく

うか？

いていなかったし・・・本当にどうしよ

校ではあ

・・・うん？そういえば秀吉とは学

須川くん

ったって

そうだ！

久しぶり

あるし・

話とか、

・や

メかな？」

も麗也と

あさっそ

？」

まりはなせなかったな〜ま！ほとんど

たちの目線がこわくてあえて話さなか

言う事実があるんだけどね・・あっ！

久しぶりっていうのもあるし、秀吉と

に話そうかな〜？僕も話したいことが

・・・うん！決定！

「あ、あのさ〜秀吉、僕と久しぶりに会

思い出話とかしないかい？ほら！その・

りたい事とか考えつくまでさ〜・・ダ

「・・・えっ？そ、そうじゃの〜！わし

話したいことがあるし・・よし！じゃ

くなにか話そうとしようかの〜麗也よ

揺しすぎ

「そ、そうだね〜ってさっきから秀吉動かない？ なにかあったの？」

だってさ

「そ、それはこちらのセリフじゃ！ 麗也
っきからオロオロしとるじゃろう？」

ちょっと

「いや〜なんか秀吉と対面するとなんか
昔と違って緊張するんだよね〜なぜか・

・・」

「・・すまん。それはわしもじゃ・・」

「・・・・・」

たいに普

しばしの沈黙・・う〜んなんか昔み

どうしよ

通に話すことができないかな〜？・・

っかな〜？・・・

らノック

がかかった・・

トント

「・・・あ、誰なのじゃ？」

からあけ

「もう！私に決まってるじゃない〜いいわよ？」

ガチャ

何の用じゃ？」

ってそちらの

男性は誰？」

かのう？麗也

「ん？姉上よ・・・もう忘れてしまったのじゃ。影譲麗也じゃ・・・」

った？」

「あ！麗也なの〜！久しぶりね〜元気だ

〜」

「うん・・・おかげさまで・・・（はあ

こんでるけど

「うん？なによ？柄にもなくなかりおち

・・・何かあったの？」

「うむ。実はのう・・・」

（説明中）

って二人とも

は一つね・・・」

教えるのじゃ。」

！

素直な気持ちを

いのよ」

と？」

説明してくれる

・・・何かあったの？」

「うむ。実はのう・・・」

（説明中）

「ふん・・・なるほどね。久しぶりに会
緊張してるんだ・・・だったら解決策

「む？姉上よ・・・もったいぶらずに早く

「そうだよ！優子！さっさと教えてよ！

「それはね・・・なにも考えずにお互いの
そのまま言葉にしてぶつけちゃえばい

「・・・？言葉にしてぶつける・・・じゃ

「・・・優子、もうちょっと分かりやすく

かな？」

「んもう！だから！思ったことをそのま

ま言っちゃえば

いいってこと！」

「思ったことをそのまま言う・・・」

ちょっと遠慮し

「そうよ・・・だって私から見たら互いに
てるようにみえるもの・・・」

見えたのじゃっ

「姉上から見たらわしらはそんなふう
たのか・・・」

「確かに・・・優子の言うとおりかもね・・・」

」

・後は二人で

「ま・・・わたしからの意見はここまでよ・・・
どうにかしなさい・・・」

ガチャ

た部分があった

「うん・・・確かに僕もちょっと遠慮して
かも・・・」

「わしもじゃ、麗也・・・」

に思ったことを

「うん！じゃ、優子の言ってた通り、心

するのじゃ。」

すぐに言っちゃおうかな？」

「うむ。わしもこれからそうすることに

「じゃ！改めて話そうか！秀吉！」

「そうじゃの！麗也！」

楽しかった事

そうやって秀吉と昔のことや今のこと、

ていた・・・

や困難だったこと、色んなことを話し

帰らなくちゃ！

そしていつの間にかもう空は暗かった・・・もう

そろ帰るね？」

「ごめん秀吉！もう暗くなったからそろ

時がたつのは・

「そうじゃの！以外に早かったのう・・・

・・・」

！今日はすごく

「そうだね・・・また今度遊ぼうね！秀吉

楽しかったよ！」

「麗也！正直わしもすごく楽しかったの

じゃ！

！
．．．．

」

してるぞい！」

で素直じゃない

さしたのかな？」

頭には今日のこと

また、遊ぼうのう！」

「うん！じゃあねー秀吉！また明日ねー

「．．．．行ってしまったのう．．」

「あんた達、あの後うまくいったのね．

「うむ！これも姉上のおかげじゃ！感謝

「あーら．．私なにかいったかしら？」

「相変わらず素直じゃないのう．．まる

麗也みたいじゃのう．．」

「ハックシヨン！うう．．誰か僕のうわ

そしてそんなことを思っているながらも

でいっぱいだった．．．。

ゝ思い出話ゝ（後書き）

いかがだったでしょうか？結構長く書いてしまいましたが最後まで読めてもらえたら幸いです。

『召喚戦争』（前書き）

あゝ本当にすいません！二日間もやらなくて・・・いろいろ事情があったもので・・・

そんなことよりも次に書く小説は試験召喚獣戦争編です！多少原作とカブりますが（もしかしたらすごくカブるかも）、見ていただけたら幸いです。

～召喚戦争～

影譲 Side

「うゝん・・・今日はやけに眠たいな・・・」

本当に今日は眠すぎる・・・へたをしたら授

業中にも

寝てしまいそうだ・・・それにしても今日は

天気が良いな～

そういう日には良いことがあるってよくお

じいちゃんが

言ってたな～よし！そうかんがえると本

当にいいことが

起きそうだ・・・

そうやって考えていると後ろから走ってき

ているような音が

聞こえてきた・・・

「おはようなのじゃ！麗也！」

「うん？誰かと思ったら秀吉じゃないか・・・

おはよう！秀吉！」

朝からまさか秀吉に会うなんて思わなかったな……

もしかしたらおじいちゃんが言ってた良いことってこういうことかな……?

「うん・やっぱり秀吉の笑顔を見ると
んか元気が出てくるな
……。」

「そ、そうかの……? そんな事を言われると
照れるのじゃ……」

「うん! そんな事ないよ! だって本当のことだもん! ホラ今だって
こんなにげん・き・ふうわあぁあ・
……」

「お主……元気になったと言っておるくせ
に大分眠そうじゃの・
いったい昨日の夜はなにをやっていたのじゃ?」

「うん・確かゲームと遊びだったよ・
それでずっとやっていた
ら、いつの間にか3時になっちゃってさ・
それでかな? 眠いのは……」

そのせいか・・・な・・・ふわあああー・・・
口を開けるだけであくび

がでる・・・」

「お主はどれだけ暇なのじゃ・・・もっと自分を大切にするのじゃぞ？」

「うん・・・分かった・・・これからは夜の1時までにするよ・・・」

「それじゃあ変わらんじやろう・・・」

秀吉とそんな何気ない話をしているといつの間にか教室に着いていた・・・

「皆～～おはよう～～！！」

僕は眠気を押し切ってあいさつをした・・・うんうん！
あいさつは大切

だよね！

「・・・影譲・・・麗也・・・だよな？」

そうやってあいさつを言うと須川君？とおぼしき人物が近づいてきた・・・

「うん！僕が影譲麗也だけど・・・何か用？」

「そうか・・・貴様が影譲麗也か・・・皆～コイツを今す

ぐ拘束しろー!」

「ハッ! 須川会長!」

「えっ? なになに? なんか僕やった? って痛い痛い! 無理やりやらない

でよ! それにそのガムテープ何? まさか、僕の口に貼る気じゃないよね?

本当にやめ・・・ムグググ!」

「影譲麗也確保! これより異端審問会をはじめめる!」

う・・・なんだなんだ? なにが起こってるんだ?

「被告の罪状は?」

「ハッ! 被告影譲麗也の犯罪は、

「朝から女子とイチャイチャしながら登校をしていた」

! です!」

「そうか・・・審議の結果・・・判決が下された・・・被告をロープ無しバンジー

ジャンプに処する・・・もういいぞ、被告のガムテープを外せ!」

「・・・プハッ! ハーハーまったく・・・君たちは僕を殺す気かい?」

『当たり前だ！女子とイチャイチャしながら登校するなど・・・』

死刑に値する行動だぞ！！！！！！』

「それにしてもなんだい？その、ロープ無しバンジージャンプって？」

「そのままの意味だ・・・」

うん？待て待て僕・・・冷静に考えるんだ・・・普通バンジージャンプって

いうのはロープがあるはずだ・・・そして今彼らがやろうとしているのは

ロープ無しバンジージャンプ・・・これすなわち意味することは・・・

「死に値するっていうこと・・・ってことは君たちは僕を殺すっていうことか！」

「今頃気づいたのか・・・バカか！お前は・・・」

「ハ・・・君たち・・・分かってないな・・・そんなことしたらどうなるかって・・・」

「知っている、そんなことは・・・」

「だったら今すぐやめた方がいいよ？そんな

こと・・・」

「これをやったら俺はこのクラスの英雄になれる・・・」

「君たちはバカかい？」

そんなことを言ってる間に僕の体は窓のすぐそばまで来ていた・・・

うう・・・結構高いな・・・

「須川よ！やめるのじゃ！そんなことはいま
すぐ！」

「秀吉くっ助けて僕をくっ！！！」

「分かった！いま、助けに行くからのう！」

よかった・・・やっぱり持つべきものは友達だね！秀
吉には感謝しきれ

ないよ・・・

「ダメだ・・・たとえ秀吉だからといって刑の執行を
邪魔させる訳には

いかない・・・」

「ええい！こうなったらすぐに鉄人を呼んでくるの
じゃ！ということだ

麗也！もう少しだけ耐えるのじゃぞ？」

「え？行かないで秀吉！秀吉ーーーーー！」

「よし・・・そろそろ落とすか・・・」

「ま、待って！まだ落とさないでよ！頼むか

らさー！」

「じゃ・・・」

ドンっ！

「うわゝゝ本当に死んじゃうってー！・・・

」

僕はこの時本当に死ぬんだなって改めて思

った・・・

☆

「ふーほ、ほんとうに危なかった・・・木の

枝に感謝だな・・・」

に着いてしまっ

僕は奇跡的に助かった・・・落ちてから地面

死ぬんだろうなって思っていたけど・・・地

面に着く前に木の枝

に引かかって助かった・自然の恵みに

「おい・・お前らいつまで遊んでるんだ。さ

あ、確か坂本くんだったっけ？いまのが遊んで

このクラスの人たちはどこまでおかしいん

「よし・・全員座ったな・・唐突だがちよつ

「……お前ら、このクラス環境に不満は

「大ありじやあああ
ーーーーー！

す、すごい・・ま、確かにそうなるよね・・壊れた窓に
壊れたちゃぶ台・・このクラスじゃなかったとしても誰
もが思うことだ・・

「そこでだ・・俺達はAクラスに召喚戦争を挑もうと思う・・」

「召喚戦争」(後書き)

すいません！序盤に思いつきり影譲麗也と秀吉のイチヤイチャ？な
ものを書いてしまって・・・でもどうしても書きたかったんです！そ
こはご了承ください・・・

次は召喚戦争の説明とDクラス戦に入るのを見ていただけたら幸い
です。後、今回長くなりすぎてすいません！後最後にもう一つ！秀
吉以外のキャラもちゃんと出させてみせます！・・・たぶん・・・い
や、絶対に！

ゝ勝機ゝ（前書き）

えゝ今回はDクラス戦のところを書きます。またこの作品も秀吉と麗也をイチヤイチヤしている場面が多いかもしれませんが、ちゃんとはかのキャラも出しますので読んで頂ければ幸いです。

～勝機～

影讓 side

『勝てるわけがない…』

『負けたら本当に負け犬になるんだぞ…』

『姫路さんがいたらもう何もいらない…』

くちぐちに皆はそういつて反対した…

一部の意見はおかしいと思うけど…

「そうだよ！雄二！いくらなんでも無望すぎると思う

」！

まで

うん？誰かと思ったら吉井くんじゃないか。さつき

なんで静かだったんだろ…

「…俺もそう思う…」

また誰かしやべった…今度は土屋くん？だった

と思う

・

けど…なんでみんな今頃しゃべり始めたんだろ・

僕たちが吉井くん達の話聞いていなかったただけかな？

は・・・」

「でも・・・僕も無望だと思うな」Aクラスに挑むの僕だって力比べができないほどのバカじゃない・・・相手の力だって分かるし、第一バカだけしかない

このクラス

じゃちよつとAクラスはキツすぎる・・・いや、大分だ

「まあ待て・・・最後まで話を聞け・・・誰もAクラスに言っていない・・・それに、まだ準備もあるしな。」挑むなんて

「え？でもさっき雄二はAクラスと試召戦争をやるって言ってたじゃないか？」

「誰もAクラスに挑むなんて言っていない・・・あくまでそれは最終目的だ・・・それにさっきも言ったように準備がそして誰かがこういったな・・・無望・・・だと。そんなことは無い・・・だよな、ムツツリーニ・・・それと姫路のスカートを

覗かないで前に来い・・・」

「・・・・・・・・・・！（ブンブン）」

「え、ええ！」

そう言うのと姫路さんはスカートを隠した・・・っ

うかよく

普通に覗こうとするなくさすがは、ムツツリーニっ

ていう

異名を持った男だ・・・僕だったらもうちょっと手

の込んだ

やり方をするけど、彼はそんなことはしない・・・う

くん・・・

この男、ある意味すごいな

「ここにいる男こそ、あのムツツリーニだ。」

『な、なんだと？奴がそのムツツリーニだと？』

『い、いや・・・本当かもしれない・・・さっきだって下

心を

あんなに必死になって隠していたし・・・』

土屋くんはバレテいるにも関わらずに畳についたあ

とを

ない

必死に隠そうとしている・・・やはり異名は伊達じゃ

・・・！

「???」

姫路さんは頭をおさえて考えていた・・・そっか・・・

優等生の姫路さんには無縁の言葉だもんな・・・

誰か意味を教えてあげればいいのに・・・

「もちろん、姫路も戦力の中の一人だ・・・説明をし

なくても
実力は皆分かっているはずだ。」

『たしかに・・・彼女ほど頼りになる人はいないな』

『ああ。姫路さんがいれば、Aクラス打倒も夢じゃな

いぞ！』

みんな思い思いの言葉を言っている・・・ま、普通に

考えればそうなるよね・・・

「そして、木下秀吉だっている。」

『おお！確か演劇部のホープだったような・・・』

『あの木下優子の・・・』

んでも

秀吉に関しちゃ僕もそうだと思う・・・いろいろな

できるし・・・手が器用だからな

「もちろん、この俺も全力をだす。」

『確かあいつは小学生のとき神童だったよな？』

てことか？』

『ということは、実質Aクラス並みの奴が二人いるっ

ないか」
おお！ということは言ってみれば無敵のクラスじゃ

Aクラス打倒
僕はさておき、そんな実力者揃いのクラスだったら

も勝機がある！

「それに、吉井明久だっている。」

シン・・・

「あのさ、雄二・・・僕をオチ扱いしないでほしいんだ

けど！」

のに・

坂本くん・それは言っちゃダメだよ・せめて最後にビシッ！

いそう
と決めてほしかったな・これじゃあ吉井くんがかわ

だよ・

「ちなみに・明久は観察処分者だ。」

『・・・それってたしかバカの代名詞じゃなかったか？』

「違うよ！ちよっとお茶目な高校生が貰う称号みたいな物だよ！」

「そうだ・バカの代名詞だ・」

「はっきり言うな！バカ雄二！」

「観察処分者・・・たしかきいたことがあるぞ・・え
ーっと・」

意味は確か教師の雑用係で力仕事とかいった類のものを

特例として物に触れる事ができる召喚獣でこなすとい
った・・

まあ・・用は教師の雑用係といった具合だろう・・
でも・・ちょっと懂れるなうものに触ることのでき

る召喚獣

があるって・・でも、この観察処分者の欠点は自分
にも

ダメージが返ってくる・・すなわち、フィードバ
ックの

ことだ・・それに召喚者は自由に出すこともできな
いし・・・

当然、そこにメリットはない・・だからこそその観察
処分者・・

凄いこともなければ便利でもない・・成績が悪いや

日頃の行い

が悪い生徒に与えられるペナルティ。バカの代名詞
と呼ばれる

所以はそこにある。

『だとしたら、戦闘の時もし召喚獣がダメージを負っ

たら、

召喚者自体もダメージを負うってことだろ？』

『だよな・・だとしたらおいそれと召喚ができない奴が一人いるってことだよな？』

いんだ。」

「その通り！だから僕はあまり戦闘に参加する気はな

雑魚だから

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような

心配はするな・・・」

「・・坂本くん・・吉井くんがそこで泣いてるよ？」

見ているこちら側としてもすごくかわいそうな絵に
なっている・・・

ほんとうに吉井くんは悲惨だな・・・

「とにかく・・明久、いまからDクラスへ宣戦布告し
に使者となって

いますぐ行け・・」

いめに遭うん

「えーそういうのって確か下位クラスが行ったらひど

じゃなかったっけ？」

「いいや・・Dクラスはそんなことはしない。騙され
たと思って

行ってみろ。」

「うゝん・・分かった。僕、雄二を信じていってみるよ・・。」

吉井くんはそう言うのとDクラスの方にクラスの皆からの拍手や

声援を受けながら行ってしまった・・本当に大丈夫だろうか・・？

☆

「騙されたゝゝゝ!!!!」

僕の目に映ったのはぼろぼろになった吉井くんの姿だった・・・

ま、おおかたこんな風になるようなことは予想していたけど・・

「雄二・・一応聞けど分かっててこんなことさせた？」

「分かっていたに決まっているじゃないか・・そんな分かっていなかったら代表が勤まらんだろ・・」

「あんたは、本当に友達かい？」

この二人をみてふと思う・・・本当に友達？・・・
と・・・

「そんなことはどうでもいいとして・・・さっさとミー
ティングを

するぞ・・・」

「ちょっと待ってよ雄二、まだいたいことは言っ
てないんだけど」

「！！・・・」

そう吉井くんが言うと坂本くんを追って屋上に行っ
てしまった・・・

「・・・さて。わしらも行こうとするかの」

「うん。行こうか、秀吉！」

僕らは弱干不安を抱きながらも屋上へと続く階段を

上った・・・

〽勝機〽（後書き）

えゝ今回は念願の秀吉以外のキャラを引き立たせることに成功できました！でも、まだ島田美波がだせてないんですよねゝ次辺りに出してみます！あと、秀吉もあまり今回はだせてなかったので、次はこの二人を主にだしてみたいと思います！長いですが、読んで頂ければ幸いです。あと、感想やコメントもよければ出してください。

＊注意・・所以という字はゆえんと読みます。

喚戦争

あともう一つ、試召戦争というのは、前作で出した召

のことです。（これからずっと試召戦争で通していきます）

ミーツィング (前書き)

えゝ今回の話はミーツィングと麗也と秀吉のイチャイチャ？な話です。はつきり言ってこの試験召喚獣戦争編はもうちよつと長くなります。すいません！でも、こんな小説でもよかったら見てください。読んでくださったらこちらとしても幸いです。

ミーティング

影譲 side

僕たちは屋上でミーティングするため、屋上へと続く階段

に上っていた・・・そして上っている途中にある会話が聞こえて

きた・・・

「ちょっと島田さん！腕を引っ張らないでよ」

「だって、あんたがいつこうに動こうとしないからでしょ！」

「だって・・・さっきのDクラスの使者で疲れたんだもん！めんどくさそう

だし、僕は遠慮するよ・・・」

「駄目！吉井も早く来なさい！でないと・・・」

「でないと？・・・」

「あんたにDas Brechen・・・確か日本語で・・・」

「・・・調教」

「そ、そう！調教しちゃうわよ！」

「島田さん！調教って言葉じゃなくて・・・せめて教育とか

指導とかの言葉を使って・・・」

「じゃあ間をとってZuchting・・・」

「・・・それは分からない」

「確か、日本語で折檻っていう意味だったかな？」

「それって、余計悪化していない？」

「うん？そうかしら？」

「そうに決まってるでしょ！それからムツリーニ！きみはなんでドイツ語の調教っていう言葉の意味を知っているのかな？」

「・・・一般常識」

「うゝん・・・もしかしたらムツリーニが言う常識って僕らと思う常識とちよつと違うのかな？」

「こら！あんたたち遊んでないでさっさと来なさい！」

「へいへい」

「返事は一回！」

「へい・・・」

そんな会話を聞きながら階段を上がっていくともう

屋上へと続く扉がもうそばまであった・・・

「開けるぞ・・・」

そういうと坂本くんは扉を開けた・・・

扉を開けると真っ先に迎えてくれたのは、心地よい、

とてもいい風だった・・・

うーん・・・今日は洗濯日和だなく！アレ？今日僕って洗濯物

干したっけ？・・・ま、いいか・・・

「じゃあ、これからミーティングを始める・・・っとその前に、
明久・・・ちゃんとDクラスには宣戦布告してきたな？」

「う、うん・・・一応今日の午後についておいたけど・・・」

「そうか・・・だとしたら、まずは昼飯だな・・・」

「そうだとしたら、今すぐ食わないとね」

「お前、ちゃんと食うものはあるのか？」

「うん・・・いつも通りだよ。」

「そうか・・・だとしたらお前はバカだな・・・」

「なんだと雄二くもう一辺言ってみろ！」

「ああ！何度でもいつてやる・・・お前はバカだ！」

「なんだと、クソ雄二く！」

「ふ、二人ともちょっと落ち着いてください！その話はミーティングが終わってから聞きますから！」

うくん・・・いったいなんの話なんだろう？妙に気になる・・・

「ま、そうだな・・・じゃ、これからミーティングを始める・・・まず、俺達はDクラスに勝てなきゃAクラスなんて言ってもらえない・・・

だからまずはお前たちに一つ言っておく・・・協力をしてくれ・・・以上だ。」

「え、それだけですか？」

「ああ、それだけだ・・・」

「なんか、パツとしないな・・・」

「じゃあもう一つ付け加える・・・俺達は絶対に負けないクラス、最強のクラスだ・・・」

『さ、さいきょうのクラス・・・』

そのとき、坂本くんの言葉に一瞬本気でそう思ってしまった・・・

ミーツイング (後書き)

すいません！なんか微妙な終わり方で！時間の都合であまり書くことができませんでした！それでも、読んで頂ければ幸いです。

く弁当、そして・・・（前書き）

えゝ皆さま、及び読者の皆さまのおかげにより、第9話まで書くことができました！そして、何よりびっくりしたのは、アクセスサイト数です！まさか・・2000を超えるとは思いませんでした！これも、読者の皆さまのおかげです！そして、最後にこんな小説ですが、今後とも読んでもらえると嬉しいです！

「弁当、そして・・・」

影讓 side

「さ、さいきょうかう

くん・・・なんかあんまりパツと

こないな・・・」

僕は坂本くんがしゃべり終わった後についてしまった・・・

それもそのはず、こんな学年最悪貧弱なクラスが最強だなんて

誰もが思うはずもないからだ・・・

「ああ・・・俺らはさいきょうだ・・・どのクラスにも負けない・・・」

「だったら、なんで雄二は最初にDクラスを狙うの？僕らが仮にさいきょうだったとしたら、普通はAクラスを狙うんじゃないの？」

僕もそう思う・・・さいきょうだったとしたら、迷わずAクラスと

戦うはずだ・・・Dクラスに戦いを挑むだなんて・・・そんなまわりくどい

仕方をしなくてもいいはず・・・

「なーに・・・Dクラスに挑むのは、今後の景気づけにしたいからだ・・・それに、

Aクラスと戦うには重要なプロセスだしな・・・」

「ふむ・・・じゃったらなぜにDクラスにいどむのじゃ？段階を踏んで

戦うとしたらEクラスじゃし、Eクラスと戦ったとしてもその

雄二

言うプロセスにもなるじゃろう・・・」

たしかに・・・秀吉の言う通りだ・・・DクラスよりもEクラスの方が勝率が高いし、わざわざDクラスに挑むという危ないつり橋を渡る

必要もないだろう・・・

「確かに秀吉の言う通りだ・・・Eクラスの方がまだDクラスよりも楽だからな・・・だが、俺らにとっちゃ初陣だ・・・初めに派手にやって

俺らはDクラスにも渡り合える力を持っていると示したいからだ・・・

だからこそ、初めはDクラスと決まっている・・・」

「え？EクラスよりもDクラスの方が楽だ・・・って、雄二もしかして

Dクラスと戦うのって結構つらいの？」

「ああ・・・少なくとも、Eクラスよりも遥かに強い・・・」

ええ！Eクラスよりも遥かに強いって・・・僕たちそんな奴らを相手に

できるのか？

「でも、だからといって負ける相手では無い・・・心配するな・・・」

はあゝよかった・・・それだったら安心して良いよね・・・

「さあゝて・・・言うことも言い終えたし・・・昼食を食うか・・・」

うん？昼食といえば・・・なんかあったような・・・

「雄二・・・どこに行くんだい？」

ガシッ

「明久・・・なんの真似だ・・・」

「雄二もしかして忘れたの？」

あ！そうだった！たしか吉井くんの昼食の件だったよね・・・

「ああ・・・確かそんな事をいていたな・・・」

「そうだよ！さっきも言った通り・・・僕のどこがバカなんだよ！」

「うん？話は簡単だ・・・お前がいつも食べているって言うてるものって・・・」

どうせ、塩と水だろ？」

「そのどこがバカなんだよ！」

いや・・・それってバカどころの問題じゃないでしょ？

塩と水って・・・そんだけでよく生きていけるな～

「吉井くん・・・それって、食べるって言わずに舐めるっていう表現の方があっていませんか？」

「ひ、ひめじさんまで・・・僕をバカにするのかい？
ちゃんと砂糖だって食べてるよ！」

「あのさ～吉井くん・・・それも、舐めるって言わないかい？」

「まったく・・・影譲くんまで・・・」

「あの・・・吉井くん、食べるものがないなら私が何か作ってきましようか？」

「へ？」

「よかったじゃないか明久・・・手作り弁当だぞ！」

「姫路さん・・・君は神さまだよ・・・」

「ふ～ん・・・瑞希って吉井だけに作ってくるんだ～」

「い、いえ・・・その・・・皆さんにも作ってきましようか？」

嫌ではなかったら・・・」

「うん？俺らにも作ってくれるのか？」

「はい！」

「す、すまんが・・・わしは遠慮しておこう・・・」

「え、なんで秀吉は遠慮するの？」

秀吉にしては珍しい・・・なにかあったのだろうか？

「ほ、ほら・・・その・・・そんなにたくさん作ってきたとしたら、荷物が増えるじゃろう？そんな、女の子にたくさん持たせては体に悪いじゃろうから・・・」

「え？そんなことないですよ？別にそんなことは気にならないので・・・」

木下くんもいいですよ？」

「い、いや・・・わしはやめておこう・・・姫路よ・・・
また別の機会に作ってくれ・・・」

「そうなんですか？ならわかりました！木下くんにもそれなりの理由があるかもしれないですし・・・また、別の機会に作ります
！」

「す、すまんのう・・・姫路よ・・・」

うーん・・・おかしい・・・秀吉、なにか隠しているな？

「いえいえ、気にしないで下さい！ということは、全部で6人分作ってくるんですね？分かりました！それでは、明日にでも作ってきます！」

「よろしく頼むね！姫路さん！」

「おおっと・・・もうこんな時間か・・・悪いが、もうあまり時間はない。さっさと食って、Fクラスに集合しろよ？それでは、解散！」

よし！解散になったな！昼食は秀吉と食べて、事情を話してもらおう！

「ねー秀吉？僕といっしょに昼食たべない？」

「・・・うむ？麗也か？そうじゃな、いっしょに食べようかのう！」

よし！誘いには乗ってくれた・・・後は事情を話すように言えば・

☆

「うーん・・・結局なにも言わなかったなー秀吉・・・」

食べている途中もずっと黙ったままだったし・・・元気もなかったなー

・ ・ ・ ひょっとして、お腹がいたいとか、何か言えない事情があるかも

しれないな

「よし・全員集まったな・やろーどもー！絶対につぞー
ー！ー！ー！」

『おおおおお
ーーーーー！
』

すごいやる気だ・・まあ、普通はそうだよな・・

よし・・僕も今考えていることは後でかんがえて・・

今は戦争に集中しよう・！

午後になった・・僕は笛の音とともにまっさきにDクラス

に向かつて走った・

試召戦争・・・開戦だ！

く弁当、そして・・・（後書き）

今回は秀吉がちょっとおかしかった話になっちゃいました！おかしかった理由は

Dクラス戦の後で分かるので楽しみにしてください！後、毎回いいですが、この小説を読んで頂ければ僕としても幸いです。

『Dクラス戦』(前書き)

やっこの試験召喚獣戦争の最も大事な部分、試験戦争を書くことができます！ここまで遅くなってしまってますいません！良い作品を書けるように頑張るので、見ていただけたら幸いです。

「Dクラス戦」

影譲 side

「秀吉く前線部隊の僕達って最初に戦うんだよね」

「そうじゃ。わしらの役目は最初に戦う、いわば奇襲部隊じゃ。どちらの攻撃が最初に決まるかで今後の戦闘状況、経過が決まってしまう・・・気を引き締めて戦うぞい！麗也よ！」

僕らの役目は前線の維持、及び時間稼ぎだ・・・

そして、僕はなぜか、この部隊の副隊長を命じられた・・・

そんな役・・・僕にはとても任せられないと思うけど・・・

そして、秀吉はこの隊の隊長・・・つまりリーダーだ・・・

一応命令には従うけど、秀吉に命令ってまったく似合わないな

そんな僕の考えをよそに秀吉はてきぱきと動いて部隊の人たちに

命令を下していた・・・おっと・・・僕も戦争に参加しなきゃ！

「麗也よ、お主はわしの援護をしてくれ！わしは攻撃にむかうから、

お主はわしの守り役に入ってくれよ？」

「う、うん・・・分かったよ秀吉。」

普段はぼくが秀吉を守る側なのに、こういう場面では僕が

逆に守られてしまう・・・自分の力の無さにとても腹立たしい・・・

い、いや・・・こんな時にイラついちゃ駄目だ！集中しよう、

そして、少しでもこの戦争の状態を良くしよう！

「おい、おい麗也！しっかりせい！今は集中じゃぞ？」

そんな事をいいながら僕の頬を秀吉がパンパンっと手で

たたいてきた・・・よし！もう考え事はよそう！

「ゴメンネ！秀吉！もう大丈夫だから・・・」

「そうかのううん？前方から敵じゃ！さっき言ったように
援護を頼むぞ！それじゃあ、試験召喚獣、サモン！」

「うん！分かったよ！秀吉！」

そういうと、秀吉の足元に幾何学的な魔方陣が現れた・・・

これが召喚獣を出すときの魔方陣か・・・僕はこれで見るのが二度目かな？

そういえば、僕の召喚獣はどんな武器を持っていたっけ？

うーん・・・なにしろ初めて召喚したのは、入学する前の一カ月前だからなくまあ、たぶん弱くないと思うけどさ・・・

「まあ、とりあえず・・・サモン！つと・・・」

僕の足元にも幾何学的な魔方陣が出てきた・・・召喚獣が出てくるまで

秀吉の召喚獣でも見ておこうかな？

うーんと・・・秀吉の召喚獣の武器は・・・大きな長刀に服は弓道着

のような服を着ている・・・顔は秀吉がデフォルメされた顔をしている・・・

なんだかとてもかわいらしい・・・おおっと！もう召喚が完了していたようだ・・・

ええっと・・・僕の召喚獣の武器はつと・・・おおすごいな！結構・・・

刀としては短いけど・・・すごい切れ味が良さそうだ！ふう・・・

よかった。ふくは、なんかよく分かんないけど・・・武装がとてもしてある

鎧みたいだ・・・っておおー！結構強そうだよ！この召喚獣、期

待てるぞ！

そんな事を思っていたら秀吉から声がかかった・・・何だろう？

「麗也はさっきからなにをしておるのじゃ！早く援護をしてくれ！」

「おーっと、ごめん、ごめん！今助けにいくよ！」

そして僕は秀吉が入っているフィールドの中に入った・・・

よーし！さっそくこの召喚獣の強さを見せてやる！

「うん？秀吉くんなんか召喚獣の頭の上になにか書いてあるよ？」

「あれは召喚獣の強さを表している、いわばテストの点数じゃな。わしはあまり勉強ができませんからあまり点は上では無いんじやが・・・」

そうか、あれが強さか！どれどれ・・・僕の召喚獣の強さは・・・

化学 木下秀吉65点 影譲麗也32点

「お主の召喚獣はなぜそんなに弱いのか！」

「し、知らないよ！そんなの、僕が聞きたいくらいだよ！」

うーん・・・見た目はあんなに強そうなのに・・・中身があれじゃなく

はつきり言って残念だよちよつと・

「お、おい！麗也！よそ見をするな！よそ見を・・・」

「へ？」

ザクツ！

「い、痛い！なんで？普通は召喚者にはダメージが無いんじゃないの！」

「ふむ・・・もしかしたらお主はなにか特別かもしれぬな・・・明久と同じで・・・」

「も、もしかして・・・吉井くんと同じ観察処分者なの？そうだったとしたらへたにダメージはくらってはいけないね！」

「うむ・・・そうじゃの・・・とそんなことよりも今は集中せい！」

「は・・・い・・・」

ということは・・・召喚獣の操作はやりやすいつてことかな？

ちよつと試してみよう・・・

「よつと・・・」

『うわっ！』

お！やはり上手くいった！これなら点数が低い部分をカバーで

きる！

「麗也、お主なかなかやりよるのう」

『へへ！隙アリー！！！！』

「あ、危ない！」

バーンっ！

「れ、麗也よ！大丈夫か？」

「う、うん・・・ちょっと手が痺れるけど・・・秀吉は大丈夫かい？」

「う、うむ・・・わしは大丈夫じゃが麗也はそれじゃもうほとんど動けぬぞ？」

「ううん・・・僕はまだ戦えるよ！」

『へへ・・・大分弱ってるぜ・・・これまでだ！死ねー！』

僕はここで終わりか・・・そんな事を思っていた時・・・

「え、援軍じゃ！麗也よ！援軍がきたぞ！」

「よし！秀吉に影譲くん！君たちはもうほとんど点数が無いと思うから点数補充に行ってきた！」

「わかったのじゃ。よし、麗也よ一旦教室に戻るぞい！」

「う、うん・・・分かったよ・・・秀吉」

僕たちは点数補充のために教室に戻った・・・

そして、点数補充をやっていると、いつの間にか戦争は終わって

いた・・・どうやら僕たちの勝利のようだ・・・

「終わったのう・・・麗也よ・・・」

「うん、そうみたいだね・・・秀吉」

僕は安心しきったせいか、その場で真っ先に倒れ、

そのまま数分ぐらいぐっすり寝てしまった・・・

くDクラス戦く（後書き）

いかがだったでしょうか？一応Dクラス戦は終わったのでよかったです！まあ、ほとんど省略とかをしてしまいましたか・・それでも読んでもらえると僕にとっては嬉しい限りです。

ゝ勝利ゝ（前書き）

今回はDクラス編が終わった後の話を書きたいと思います！できる限り秀吉と麗也のイチヤイチャ？的なものにしないように頑張りたいと思います！それでは、こんな小説ですが、最後まで読んで頂けると幸いです。

勝利

影讓 side

「う・う・うん・眠たかったからちよつと寝てしまったよ・
だけど・やけに寝心地がいいなーなんでだろう・って、
ええー！秀吉なにやってるのー！」

「やっと起きよったか・麗也。何をやってるって、膝枕？と
確かいうはずのものをやっておるのじゃが・」

「違う！違う！なんで僕が秀吉の膝で寝ているのかって聞きたいんだよ！」

「ふむ・それはのう・お主がさっき真っ先に倒れたじゃろう？
それで・頭を床にぶつけると危険じゃから・わしの膝の上に
お主の頭を置いたのじゃ・どうじゃ？寝心地は・」

「う、うん・寝心地はねくはつきり言うともものすごく気持ちいいよ！」

「そうか・それはこちらとしてもやったかいがあるのじゃ！麗也よ・」

「もう少し寝たいか？」

「うん・僕まだ後10分ぐらい寝たいな」

「わかったのじゃ・なら、何か用があるときは起こすぞ？いいな？」

「うん・・・わかったよ秀吉くそれじゃあおやすみ・・・秀吉」

「うむ・・・おやすみなのじゃ、麗也。」

うーん・・・それにしてもこの膝枕気持ちいなくいつそのまま

ずっと寝ていたいよ・・・

「・・・・おい、麗也よ・・・起きるのじゃ！麗也！早く起きるのじゃ！」

「う、うーん・・・よく寝たよ・・・おはよう秀吉・・・ってなんだこれは？」

僕が目を覚ました時には手には手錠がしてあって周りにはクラスの

皆がいた・・・物騒な物を持ちながら・・・

「み、みんな落ち着こうよ！ちょ、ちょっとやめてくれよ・・・

あはは・・・そんなナイフをどうするんだい？もしかして僕に刺そうだなんて・・・

考えてないよね？」

「影譲麗也・・・キ・サ・マ・ヲ・コ・ロ・ス！……！」

『血祭りにしてやるわ！』

「ぐああー！！やめてくれー！！！」

そんな時だった・・・空から天使のような声が聞こえてきた・・・

「・・・おい、麗也よ・・・起きるのじゃ・・・麗也！早く起きるのじゃ！」

「・・・う、うん・・・おはよう秀吉・・・ってなんだこれー！！！」

僕の手には手錠がしてありクラスの皆は・・・ってこれって夢の中と

同じじゃないか！まさかあれって正夢？

『死ねー！！！！影譲麗也ー！！！！！！』

「うわー！！！！死ぬー！！！！！！！！！！」

僕はこの時30分もボコボコにされていた・・・っと、

そんな事実を後になって知った僕だった・・・

☆

「イテテ・・・まったく皆は加減を知らないな・・・」

「まったくじゃ・・・ほれ、まだ痛むか？」

「うん・・・まだ痛いよ・・・」

僕は本当に殺されそうになったが何とか助かった・・・

このクラスの前で秀吉と話したり、何かをするのは

もうやめよう・・・

「影譲くん、大丈夫かい？確かに皆も悪いけど・・・君も十分悪いよ？秀吉に膝枕をしてもらうなんて、そんなのこのクラスの前でやったら「殺してください」って言ってるようなものだよ？」

僕はここに誓おう・・・もう二度とそのような事はしない・・・と。

「おー影譲・・・お疲れ様・・・お前らのおかげでこの戦争に勝てたんだ・・・

ありがとな！」

「いやいや坂本くん！君の指揮のおかげだと思うよ？」

「うん？・・・そ、そうか？そう言われると照れるじゃないか・・・」

『いや、坂本のおかげだぞ！』

『ほんと、代表のおかげだと思うぞ！』

うん・・・僕も今回はそう思う・・・彼のおかげで勝てたようなものだからね！

「おい、お前ら・・・今日は疲れたから解散な・・・以上!」

「あ! まって坂本くん! ちょっと聞きたいことがあるんだけど・・・なんでDクラスを奪わなかったの?」

「うん? その事については明日でいいか? 今日はもう疲れてるんでな・・・」

「あ、そうなの? だったら明日でいいよ!」

でも、ちょっと気になるな。ま、いいか! 明日聞けるし・・・

「じゃ、帰ろっか! 秀吉!」

「うむ・・・そうじゃな。」

僕はその日の帰り、ずっと秀吉といっしょに今日の事を

話していた・・・

ゝ勝利ゝ（後書き）

えゝすいません！予想通り秀吉と影譲のイチヤイチヤになってしまいました・・・

本当にすいません！次はちゃんとした作品を作りたいと思うので、こんな小説でよければ読んでください！読んでくれればこちらとしても嬉しい限りです。

〱手作り弁当〱（前書き）

えゝ今回の話の前に少しお知らせですが・・僕の小説って所々日本語とか間違ってますよね！

だから1ゝ12話まで全て直しました！それだけです・・別にどうでもいいって方はすいません！そして今回の話ですが・・あの姫路さんの手作り弁当のはなしになります。でも、秀吉が実は・・まあ、この続きが気になる方はなんとなく見てください！すいません！生意気なこと言っちゃって・・とにかく、どうぞ！

〽手作り弁当〽

影譲 side

「うん・・よく寝たよく寝た・・うん？あそこにいるのは、もしかして・・秀吉？」

あの、後ろ姿、そして髪は絶対に秀吉だ！

「おーい！おはよう！秀吉！」

「うむ？なんじゃ・麗也か、おはようなのじゃ！」

「うん？なんか柄にもなく疲れているというか、悩んでいるような顔をしているよ？」

「そ、そうか？なぜ、わしがそのような顔をしていると思うのじゃ？」

うん？なぜって、それはもちろん・・

「だって、いつもの元気で可愛い顔じゃなかったから・・」

「か、可愛い顔・・じゃと？おぬしはわしを女と勘違いをしておるのか？」

「あ！ごめん・言い方間違ってた・・可愛いじゃなくて、カワイイだったね！」

「な、なにも変わっておらんのが・・・いったいどうしたのじや？」

最近の麗也はちょっとおかしいぞ？」

「そんなこと無いよ！だって僕のどこが・・・」

あれ？ちよっとおかしいぞ僕・・・さっきの会話を思い出そう・・・

さっき僕は秀吉の顔を可愛らしい顔、っていったような・・・

ってアレ？僕、そんなこと秀吉に言っちゃったの？

「ご、ごめん！秀吉！あんな事言っちゃって・・・」

「いや、別にいいのじゃぞ？麗也は最近疲れておったからのう・・・誰にでも間違いはあるのじゃ。」

「う、うん・・・ごめんね・・・秀吉。」

最近の僕はどうも変だ・・・秀吉の事を女の子として

意識してるなんて・・・たぶん・・・僕の予想からして、

男だらけのFクラスに馴染んでいく内に、秀吉の事を

女と見てしまったようだ・・・これから、気をつけなきゃ！

そして、そんな事を思いながら教室に着くと坂本くんが

皆に向かってこう言った・・・

「おーい、お前ら全員席に座れ・・・ちよつと言いてー事があるからよー・・・」

うん？話ってもしかして昨日ぼくが言った事かな？

だとしたら、早く席に座ろうとしようかな？

「えー言いたい事は皆分かるかもしれねーが・・・俺らFクラスはDクラスを奪わなかった・・・それはなぜか？答えはこうだ・・・俺たちが欲しいのはAクラスだ・・・違うか？」

『まー確かにそうだけどよー・・・』

『でもなー俺達、Dクラスに勝つのが精一杯だったもんな』

皆、坂本くんの意見に反対の意見が飛び交った・・・

ま、そりゃそーだよねーDクラスに勝つのが確かに精一杯だったのは

事実だし・・・

「ま、確かに俺らはDクラスに勝つのに精一杯だった・・・しかしまだ

ムツツリーニや姫路の力を充分に出せていない・・・それに、俺だって・・・

な？」

うーん・・・そう言われればそのような気がする・・・まだ姫路

さんの力

はあの戦争では半分以下だったし、それにまだ土屋くんも出ていなかったし、

ましてや坂本くんも出ていなかった・・・なのにも関わらずにDクラスに勝って

しまった・・・まだこのクラスには充分力がある・・・

「一つてめーらに聞く・・・俺たちにこんなちゃぶ台や壊れた窓は必要か？」

『必要じゃない!!!!!!!!!!!!!!』

「俺らに必要なのはAクラスのシステムデスクと・・・」

『すぐでかいディスプレイだーーーー!!!!!!!!!!!!!!』

「それならば俺らのやる事は一つだろう？」

『Aクラスをぶったおすことだーーーー!!!!!!!!!!!!!!』

「なら、覚悟はいいな？」

『当たり前じゃねーか!!!!』

「Aクラス・・・絶対に倒すぞーーーー!!!!!!!!!!」

『おおおおーーーー!!!!!!!!!!!!!!』

すごい・・・皆の熱気で燃えてしまいそうなぐらい熱い・・・

あれ、次の授業ってそういえばなんだっけ？

「お前らー！！次の時間は昨日失ってしまった点の回復試験だ！全員ペンを持って次の試召戦争に勝てるようにテストで良い点をとれ！分かったな！」

『おおおー！！！！！！』

「・・・ねー秀吉・・・このクラスってこんなに熱かったっけ？」

「・・・わしもそれを麗也に言おうと思っておった所じゃ・・・」

このクラス、一応まとまってるけど、こんなに熱いとちょっと
な

☆

「うー・・・ものすごく疲れたよ。」

「そうじゃのう、とても疲れたのじゃ・・・」

そんな話をしていると、いつの間にか時刻は12時を指している・・・

もうこんな時間か・・・

「うん？もうこんな時間か・・・そろそろ昼飯の時間だな・・・」

「そうだね、雄二、あ！そうだ、よかったら僕といっしょに食べない？」

「別にいいが・・・そうだとしたら早く行こうぜ？」

「そうだね・・・早く食堂に行こうか！」

「あ！吉井達食堂に行くんだ・・・だったら私もいっしょにいい？」

「えっ？別にいいよ島田さん！」

「・・・・俺も一緒に行く」

「ムツツリーニも？それだったらいっその事皆で行こうよ！」

「えっ？僕もいいの？吉井くん？」

「もちろんだよ！影譲くんもいっしょにいいよ！」

「それなら、秀吉もいっしょにいいよ！」

そんな時だった・・・突如後ろから声がかかった・・・

「ま、待ってください！今日、弁当作ったので皆でどうですか？」

「お、例の手作り弁当ってやつか？」

「はい！嫌じゃなければ・・・」

「ありがとう！姫路さん！」

「そうか、そういえばそんな事あったな・・・って秀吉は？」

さっきから黙ってたと思ったらいない・・・どこに行ったんだ？

「あの、影譲くんも一緒に・・・」

「あ、ごめん姫路さん！僕、ちょっと用事思い出しちゃって行けないんだ・・・ごめんね！」

「あ、そうなんですか？だったら仕方がないですね。」

「ごめんね、本当に・・・またいつかね！」

「はい、分かりました。」

「影譲くんもついてないな～ま！影譲くんの分は僕が食べるよ！」

「う～ん・・・でも、しょうがないや・・・いいよ、別に。それじゃあ皆また後でね～！」

タタタタッ！

「あいつ、そんなに急ぐようがあるのか？」

「・・・・・・・・怪しかったから一応盗聴器を付けておいた」

「ナイスだ、ムッツリーニ！」

後ろから何か聞こえるけどそんなの今は気にしない！今は・・・

秀吉を見つけるのが先決だ！

・・・一応屋上に来たけど・・・いるかな？って、あ！

あの姿は・・・間違いない・・・秀吉だ！

「秀吉！」

「・・・うむ、麗家か？姫路の手作り弁当を食べるのじゃなかったのかのう？」

「いや・・・秀吉がいなかったから、気になって追いかけてきたんだよ！」

「まったく・・・おぬしという奴は・・・でも、正直嬉しいぞい！」

「あれ？秀吉が持ってるの何？」

「うむ？これかのう？実は、朝早くから起きて作った弁当じゃ」

「え？弁当？それは自分で食べる用の？」

「いや・・・麗也のために、作ったの・・・じゃ・・・」

秀吉はそう言う顔が赤くなっていた・・・それとなぜか、

胸がドキンドキンと鼓動していた・・・

「僕の・・・為・・・に・・・?」

僕もそう言う顔が真っ赤になってしまった・・・

自分でも分かるほどに・・・

「れ、麗也よ・・・わしの弁当・・・食べてくれるか?」

その言い方はとても恥ずかしげに、そして何より言い方がとても

可愛かった・・・

「ありがとう、秀吉・・・僕の為なんかに・・・でも、なんで?」

「いや、おぬしが試召戦争の時にわしを守ってくれたじゃろう?
この弁当はほんのお礼じゃ。」

うゝん・・・あんまり記憶に無いんだけど、かすかに覚えている
ような・・・

覚えていないような・・・

「そ、それよりも早く弁当を食べるのじゃ! 時間が無いぞ!」

「え? あ、うん・・・じゃあ、いただきます!」

どれから食べようか・・・全部おいしそうだな・・・うゝん・・・

よし、じゃあ最初はからあげから!

「じゃあ、いただくね！秀吉！」

「味には自信が無いのじゃが・・・どうかのう？」

「すごくおいしいよ！秀吉ってもしかして料理上手？」

「いや・・・全くじゃが、喜んでもらえて嬉しいのじゃ！」

うーん！どれもこれも全部おいしい！うん？そういえば

誰かが手作り弁当を作ってもらったらアレをやってもらえって

言ってたな

「ねー秀吉ーちょっとお願いがあるんだけどさーアーンってやって
くれないかなー？子供の頃の夢だったんだよ！ねーお願いだよ

」

「う・・・まったく、そんな目をするな・・・ったく、今日だけじゃぞ？」

やったー！やってくれる！嬉しいな！

「ほれ、アーンじゃ」

「アーン・・・（モグモグ）おいしいよ！秀吉！」

本当に・・・今日は大変だったけど・・・良い日になったな

「あれ？一つ聞きたいんだけど・・・朝元気がなかったのって・・・疲れてたから？」

「うむ・・・まあそれもあるんじゃないが・・・ちょっと違うのう」

うん？だったらなんで疲れてたんだろう？

「っと・・・そんな事よりも、さっさと食べてしまおうぞい！」

「うん、分かったよ！秀吉！」

僕は秀吉と昼食を食べた後にすぐに教室に戻った・・・

く手作り弁当く（後書き）

いかがだったでしょうか？なんか、途中から変な風になりましたが、
気にせず読んで頂けたら幸いです。

くBクラス戦に向けて・・・く（前書き）

いやく本当にすいません！かなり小説を投稿するのに、日が経ってしまいました！

本当に、読者の方々には本当に申し訳ないです！小説がなかなか書けなかった理由は、冬休み色々と大変でして・・・でも、これから小説が書けるようになったので、安心してください！そんな事よりも、今回の話はBクラス戦に向けての話になります。楽しんで読んでもらえれば幸いです。

「Bクラス戦に向けて・・・」

影讓 side

「いやゝしかし、秀吉の作ったお弁当おいしかったね!」

「そ、そうかの? そんな事を言われると照れるのじゃ・・・」

「いやいや、全然お世辞じゃないって! それと、照れた時の秀吉の顔・・・カワイイ・・・」

「うむ? なんかつたか、麗也?」

「い、いや・・・何でもないよ! 秀吉!」

あゝなんか最近、ますます秀吉が女の子に見えてきたよ・・・

でも、秀吉は男の子だしなゝ惑わされちゃ駄目だ!

そんな事を思いながら廊下を歩いて、Fクラスに着いた。

「皆ゝごめんねゝ! あ、後皆姫路さんのお弁当おいしかった?」

そんな事を言うと吉井くんがものすごい速さでこっちに来た・・・

なんだろう・・・

(影讓くんがいなかったせいでこっちは大変だったからね!)

僕にしか聞こえない程度で吉井くんがそう言った・・・

（大変だったって・・・いったいどういう事？）

（実は、姫路さんがお弁当作るって言って作ってきたでしょ？初めは

おいしそうで食べたいと思ってただけど・・・姫路さんの弁当って恐ろしいほどまずかったんだよ！だから、影譲くんがいなかった分雄二が死に物狂いで食べたんだから・・・）

ちよつと言ってることが分からなかったので一応整理してみよう・

・

・まず、僕がいなかったせいで吉井くん達は一個余分に弁当を食べてしまった

・そして、一見おいしそうに見える姫路さんの弁当だったが、実はすごくまずかった

・そのせいで今、坂本くんが気絶？をしている

・・・以上の事を考えてみると、まあ形がどうあれ僕が悪い事に変わりはない・・・

謝らなきゃ！

（吉井くん！ほんとうにごめんね！）

（いや、僕よりも雄二に謝った方がいいかもよ？）

そ、そうだな・・・一番の被害者、坂本くんに謝らなきゃいけないね

（ごめんね！坂本くん！悪気は本当にないんだ、許して！）

（ま、まあ気にする・・・な・・・）

ヤバイ・・・坂本くんの目が虚ろになっている・・・本当に申し訳ないな

（そ、それに・・・影譲よりも全然罰は良い方だからな・・・）

うん？何の事言ってるんだろう・・・坂本くんは・・・

「そ、そんな事よりも雄二！次ってどこと戦うの？」

それは僕も気になる・・・何て言っても、相手次第で今後の予定が変わるからな

「ん？試召戦争の相手の事か？」

「うん・・・」

「相手はBクラスだ・・・」

「えっ？Bクラスが相手なの？」

「しかし、なんでBクラスを狙うの？」

そう僕が言っていると坂本くんは険しい顔でこう答えた・・・

「はっきり言おう・・・俺たちじゃどうあってもAクラスには勝てない」

「え？雄二にしてはらしくないね・・・まあ、普通はそう答えるか」

まあ、Aクラスって言うのはヤバイと噂で聞いたことがある。クラスの、

50人の内、40人はBクラスよりも点が上の連中だけど、残りの10人が

どうもやばいらしい。特に、Aクラスの代表をやっている霧島翔子さん。あの

人の力は想像を絶する力で、恐らくFクラスの人が彼女に奇襲に成功したとしても、

逆に返り討ちに遭ってしまふ。・・・どうあっても、坂本くんが言ってた通り、

Aクラスには負けてしまふ。

「それじゃあ、僕たちの最終目的はBクラスに変更って事？」

「いや、最終目的は変わらない・・・」

「それじゃあ、言ってる事がさっきと違うじゃないか！」

「確かに俺らのクラス単位では勝てない・・・だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ちに持ち込む？どうやって・・・」

「もちろん、Bクラスを使う」

Bクラスを使うだって？どうやるつもりなんだろう・・・

「明久に一つ問う・・・下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるか？」

えーっと確か、下位クラスが負けた場合は設備のランクが一つ落とされるはず。

「設備のランクが落とされるんだよね？」

「その通りだ・・・では、上位クラスが負けた場合はどうなる？」

確か、相手クラスと設備を入れ替える事ができるんだよね。吉井くんもこれぐらい

わかっているは・・・

「悔しい」

ず・・・ってええー！悔しいって何？まあ、確かに悔しいかもしれないけどさー

もうちょっとマシな言葉考えてよ！

「はあ・・・明久に聞いた俺がバカだった・・・」

「なんだと、バカ雄二〜!」

・・・ごめん、吉井くん。それはさすがの僕でも思っちゃった。

「まあいい・・・上位クラスが負けてしまうと相手と設備が入れ替わってしまう・・・」

そこで俺の考えなんだが、それを利用してBクラスと交渉する」

「交渉・・・ですか？」

「ああ・・・まず、Bクラスを殺したら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと

攻め込むよう交渉する。設備を変えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけなら

Cクラス設備で済む。まず、上手くいくだろう・・・」

「ふんふん、それで雄二？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』と

いった具合にな」

「「「「なるほどー!」「」「」」」

その場にいた、土屋くんを除く皆が（僕も含む）理解した

「しかし、それでも問題はあるじゃろう。体力としては面倒じゃが、Aクラスとしては

一騎討ちよりも試召戦争の方が確実にやからな。それに・・・」

「それに？」

「そもそも一騎討ちに勝てるじやろうか？こちらに姫路がいる事は全クラス中に

知れ渡ったかもしれぬし・・・」

秀吉の意見は分かる・・・姫路さんがいるということはこの前の戦いで分かっただろうし・・・

相手も何らかの姫路さんへの対策は練っているはず・・・

「その辺の問題に関しては考えがある。心配するな」

「とにかく、Bクラスをやるぞ！細かい事は後で教えてやる」

「ふーん、雄二にも考えは一応あるんだ」

「おっと、明久・・・今日のテストが終わったらBクラスに宣戦布告しに行け・・・」

「断る・・・雄二が行けばいいじゃないか！」

おっと！急に吉井くんのオーラがどすグロイ物になっているぞ！

「やれやれ・・・ならジャンケンで決めるか？」

「ジャンケンだって？」

うーん・・・僕の予想で吉井くんが負けるだろう・・・

「OK! いいよ!」

「なら、心理戦で行こう」

心理戦か・・・これなら、まだ吉井くんにも勝利の機があるぞ!

「分かったよ。なら、僕はグーを出すよ!」

「そうか・・・なら・・・」

「俺はお前がグーを出さなければブチ殺す」

「えー! それって・・・」

駄目だ・・・吉井くんは絶対グーを出してしまう・・・

「行くぞ、ジャンケン」

ポンっ!

吉井くんはグーを出し、坂本くんはパーを出した・・・やっちゃったよ吉井くん・・・

「決まりだ・・・行って来い明久」

「絶対に嫌だー! 理不尽過ぎる!」

まあ、吉井くんが考えていたものちょっと違ったかもしれないね・・・

「もしかして明久、Dクラスの時見たいになる事を心配しているのか？」

「それもあるけど・・・」

「なら大丈夫だ・・・今度こそ保証する」

あらら・・・坂本くん、あんな目で見てるよ・・・これじゃあ吉井くん断れないだろうな」

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いと言われているからな」

「そっか・・・それじゃあ、僕にしかできない重大な任務だね！」

「でも、お前不細工だしな」

うわっ！本人を目の前に普通に言っちゃってるよ、坂本くん！

「失礼な！どこからどう見たって365度美少年じゃないか！」

「吉井くん、5度だけ多いよ・・・」

「実質5度じゃな・・・」

「二人なんて、嫌いだー！！！」

そう言うと、吉井くんは泣きながら自分の席に向かった

泣かなくてもいいのに・・・

「お、それとムツツリーニ・・テープの中には何があった・・」

「・・・・・二人ののろけ話」

「そうか・・・おい、須川ー！」

「うん？なんだ、坂本？」

「いや実はな・・（ゴニヨゴニヨ）・・・という訳だ」

「そうか・・・影譲、ちょっと来い・・」

うん？須川くんが僕を呼んだかな？・・・なんだか嫌な予感がする・・

「何かな、須川くんってぎゃあああー！」

「キサマには一回常識って物を教えてやる！！！」

須川くん曰く『常識』というものを体に叩き込まれた・・・

くBクラス戦に向けて・・・く（後書き）

うー・・・なんか久しぶりに書いたのであまり良いものができませんでした。これから、もっとおもしろくできるように頑張りますので、これからもこの小説をよろしくお願いします！

くBクラス戦前編く（前書き）

えくまた僕の小説をみてくれた方、ありがとうございます！今回は、Bクラス戦を

書きたいと思います。長いので二つに分けて書きました。見てくれたら幸いです。

くBクラス戦前編く

影譲 side

「あー・・・えらい目に遭った・・・」

僕は須川くんに授業中にも関わらず制裁？見たいなものを受けた・

しかも、それを見ていた先生は何の注意もせず、そのまま授業をしていた・・・

全く・・・この学校はちよっとおかしい！いや・・・かなりだ！

でも、僕だけが何もボコボコにされていた訳ではない・・・

吉井くんも、その類の制裁を受けた・・・自分の事は言えないけど、なんだか

かわいそうだ・・・しかも、吉井くん・・・泣いてるし・・・

「しかし、麗也も相変わらず須川にやられておるのう・・・どれ、痛むか？」

「はあゝ秀吉だけだよ・・・心配してくれるのは・・・」

「こら！そんなにしがみつくだない・・・また、須川にやられるぞい？」

そ、そうだった・・・こんな事をしていたら、また須川くんにやられてしまう・・・

「そ、それよりも、吉井くん・・・試召戦争の宣戦布告はして来たの？」

「うん・・・死にそうになったけど・・・一応明日の午後って言ってきたよ・・・」

「そうか・・・だったら、今日は解散だ・・・皆、明日の為に備えるように・・・」

以上！

ふうー・・・解散だよつと・・・さて、疲れたし・・・今日は帰ろうかな？

「それじゃあ、麗也・・・いっしょに帰るぞい！」

「うん・・・そうだね、じゃあ帰ろうか！秀吉！」

僕は秀吉といっしょに帰り、家に着いたらすぐに眠りについた・・・



「よし、貴様ら・・・Bクラスを殺る気は充分か？」

『もちろんだー！ー！ー！！！！！！』

そんなずぶとい声を聞いたのは翌日の昼の事だった・・・

しかし、今日は疲れたな・・・朝からずっと補充テストだったし・・・でも、そんな苦労も今日で終わる・・・

「麗也よ・・・わしらの役目は中堅部隊、しかも今度はお主が隊長でわしが

副隊長じゃ・・・ちゃんと、やるのじゃぞ？」

「ええー！そんな話は聞いてないよ？」

「すまない影譲・・・以前の試召戦争でお前の力を見させてもらった・・・

そこで、分かった事はお前が明久と同じ観察処分者という事だ・・・

そして、召喚獣の扱いは上手いと秀吉に聞いている・・・
点数が低いお前でも戦力には充分なる、だから隊長をお前に決めた・・・」

「あの、実際には観察処分者じゃなくて、それと同じ力が使えるっただけで・・・」

「とにかく、無事大役を果たせ！影譲・・・」

うわ、思いつきスルーされた！ま、いいや・・・どうせ僕の出番なんて指示くらいだし・・・

キンコンカンコンコン

あ、鐘が鳴った・・・試召戦争、開戦だ！

「麗也よ・・・わしらは中堅部隊じゃ・・・まだ出陣はせんぞい？」

「わ、分かってるよ！それと、気になった事があるんだけど、Bクラスの

代表って誰？」

「うむ？麗也は知らなかったのか？まあ、無理もないのう・・・Bクラスの

代表はあの根本らしい・・・」

「根本くん？それってどんな人？」

「まあ、一言で言うならば、極悪非道のやる事に手段を選ばぬ・・・最低な男じゃな・・・」

うわーそれともう、人として駄目なんじゃないの？

「だ、だったらさ・・・そんな最低な人がやる事なんて分からないから、一回吉井くんを
後退させた方がいいんじゃないの？」

そんな人が考える事なんて・・・想像もつかない・・・

「そうじゃのう・・・雄二よ、ちょっと明久達を後退させるように言
ってきてよいか？」

「ああ？別にいいが・・・くれぐれも戦闘なんかするなよ？」

「分かっておる・・・麗也よ、行くぞい・・・」

「ええ？ ああ、うん・・・」

あんま、秀吉元気無いな・・・何か思い当たる節があるのだろうか・・・

☆

「こ、これはひどい・・・」

「いかにも根本が考えそうなことじゃな・・・」

僕らが吉井くんを呼びに言っている間に誰かが教室をめちゃくちゃにしたらしい・・・

ま、恐らく根本くんだと思うけど・・・

「ねえ、雄二！ いったいこれはどうゆう事？」

「やられた・・・根本め、地味だが補充テストにはとても影響を及ぼす

嫌がらせをして来やがった・・・」

確かに、ただ教室がめちゃくちゃになっただけで誰も怪我してないからいいけど、

テストのやる気とかはなくなるよね・・・

「だが、全く作戦には影響は無い・・・安心しろ」

「でも、なんで雄二は気がつかなかったの？」

「Bクラスと協定を結びに教室を空にしていた・・・」

「協定・・・だって？」

「ああ、四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の

午前九時に持ち越し。それまでは試召戦争に関する行為は禁止ってな・・・」

「それ、雄二は承諾したの？」

「ああ・・・」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては良いんじゃないの？」

「姫路以外は・・・な？」

「そうか、そりゃそうだよね・・・」

「今日には決着がつきそうに無い・・・恐らく、協定どうりになるだろうな・・・」

「ま、そうなるね・・・」

「明日にはクラス全体の力よりも、姫路個人の力が必要だからな・・・」

「あ、だから協定を承諾したんだ・・・」

「ああ・・・この協定はこっちとしてはかなり良いからな・・・」
うーん・・・なんか引つかかるなく根本くんという男はそんなに甘い男じゃないはず・・・

「とりあえず、明久達前線部隊は戦場に戻り、影譲たち中堅部隊は戦場に行け！」

「うん！分かったよ、雄二！」

「分かったよ坂本くん！秀吉、行こっか！」

「うむ！」

「シャープペンと消しゴムの手配は任せておけ！」

・
僕らはお互いに気を付けるように言い合って、戦場へと向かった・・・

☆

「ああゝ疲れた・・・」

「そうじゃのう・・・麗也はよく頑張ったぞい！」

そう言うとき秀吉は僕の隣に座った・・・

「また、わしの膝で寝たいかのう？」

「いや、それはまたの機会にして！」

また、ボコボコにされるのは嫌だ・・・

「・・・・・・・・（コンコン）」

「うん、どうしたムツツリーニ？」

そう言うと土屋くんは不可解なことを語りだした・・・

くBクラス戦前編く（後書き）

すいません！今回は長いのでここで終わらせてもらいます！読んでもらえると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3080z/>

僕とバカと召喚獣達！

2012年1月8日22時47分発行